

研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

序

〔論文〕

砂川期の基礎的研究(2) —ナイフ形石器を廻る諸問題 (上) —

……………西井 幸雄 (1)

押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性

—絡条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—

……………金子 直行 (25)

加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック (前) ……………橋本 勉 (87)

瓢箪形注口土器の成立と展開……………上野真由美 (109)

方形周溝墓と土器Ⅱ 一概観 その1—……………福田 聖 (133)

埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器

……………永井いずみ (169)

加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック（前）

橋本 勉

要旨 縄文時代中期後半～終末にかけて関東地方加曾利E式土器が拡散する。これは、日本海を經由して南下した大木9式とともにさまざまなに変容しながら長野県から岐阜県を越えて関西圏にまで広がる。これによって、中津式や大杉谷式が生成される。また、大木式圏内においても、大木9式の変容や門前式の成立などにかかわる。言い換えると、加曾利EⅢ式に始まる流麗な磨り消しの拡散である。ネットワーク社会の常でこれらはさまざまなフィードバック現象を起こす。言い換えれば、土器の変動をもたらした関東に中津式が戻ってくるという仮設である。こうした拡散とフィードバックを遺構一括資料をもとにさまざまに検索し、分析していこうとするものである。

はじめに

縄文時代中期後半期に東北地方南部と関東地方同じくして土器の拡散化が起きる。両者ともに多くは南下する。

東北地方南部では、山形県から日本海ルートで南下し、新潟県そして長野県へのルートである。このルートは、従来から憶測されていたことではあるが、近年の発掘調査とそれに伴う研究や研究会などによって具体的な成果となって現れてきだしている。新潟県下での資料の増加、長野県屋代遺跡群での新発見は新しい展開を見せている。

こうした状況下に、2002年長野県でのシンポジウム、2003年縄文セミナーの会のシンポジウムが開催され、停滞気味の関東地方サイドとはまた違った活況を呈している。

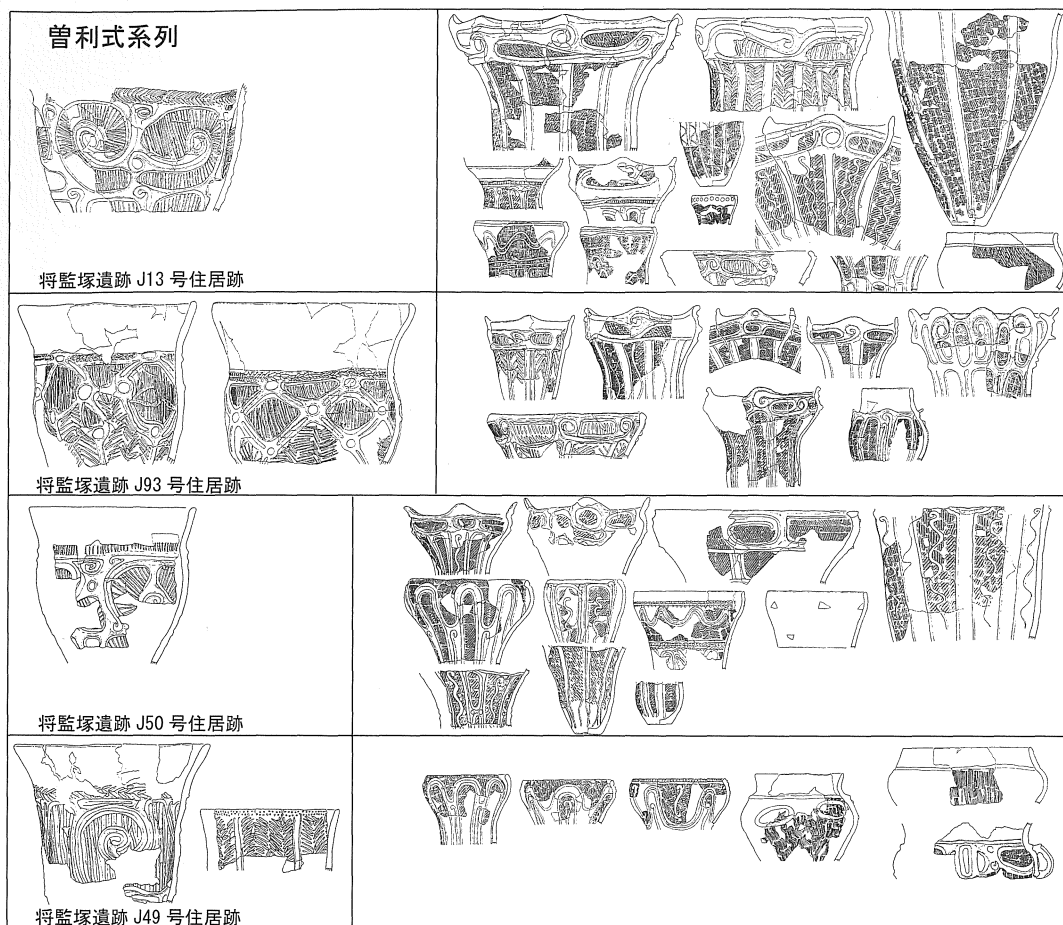
また、前記したが長野県下で加曾利E式系統資料の増加が続き、千曲川流域などでの具体像が見えるようになってきた。2002年シンポジウム資料や2003年開催された展示会はそれを如実に物語っている。さらに、岐阜県での加曾利E式系土器の増加も加わって、筆者が考えていた加曾利EⅢ式の拡散（磨り消し縄文系土器の拡散）が各地の後期土器の引き金になっていくとの考えがつながり出してきた。何年か前に事業団諸氏と当該地方の加曾利E式関連資料を見てまわった実感がようやく具体化してきたと言い換えてもいい。

筆者がこの論文を書くにあたって以下のことを念頭においている。これは、過去にあらわした小論の延長線に在る。

1 筆者の興味の主体は、編年にはない。たとえば、土器はどのように変化するのか、そしてその変化は何ゆえ起こるのか。地域で進化論的に変化していた土器が異なった構造と文様に変化するの何故か。などである。したがって、隣接する1～2の形式をあまり気にしない。

2 縄文時代はネットワーク社会である。情報の伝達は単一方向ではない。必ず、双方向であると思う。関東地方での大木9式を見ると、東北南部の加曾利EⅢ式は必ず存在しそれも合わせて検討するのが良い。（これは、谷井・細田論文によく現れている）

3 情報伝達の力関係は、1対1の均等な場合とは限らない。流れる流量が多いほうを「拡散」、



第1図 古井戸・将監塚遺跡の曾利系土器と加曾利EⅢ式土器

流れる情報の少ないほうを「フィードバック」として話を進める。これは、遺構一括資料と組み合わせ、さまざまな考えの保証（バックアップ）となる。

4 筆者はこれまで関東地方の後期は、中津式の拡散によって編年の分岐点としてきた。はたしてそうだろうか。データが集まりだして各地の状況を比較検討するに従って、加曾利EⅡ式後半～Ⅲ式が隣接する曾利式土器圏や大木式土器圏に拡散し、縄文時代後期の華麗なる磨り消し縄文の引き金になったのではないかと、この考えを深くしている。今後細かな分析を展開する。

5 こうした分析には、遺構一括資料を重視する。近接する時期の土器群を遺構内で分割するかないかは数の論理を適用するという非常にシンプルな考えをもっている。隣接するAとBの土器群を考えると、AとBが遺構で一緒に出土する割合が50%を超えてくれば、同一時期の可能性が高いということである。もちろん、これは集めうる限りのデータを比較検討しなければならない。

6 日本の高度成長期～バブル期にかけて誰もが考えられないような発掘調査の件数となった。現在でも膨大な量の縄文時代中期資料が蓄積されている。もはや、個人の記憶力では限界がある。

遺構一括の土器をデジタル化し、PC上でさまざまに比較検討する以外に手はない。不十分ではあるがこうした研究方法を実践する。

7 高速通信普及を見越してデータはPDF化し、ハードディスクに収容する。データ化に当たって、ある程度印刷に耐えられるようにする。PDFデータから個別の土器を切り出し→画像ソフトで加工→イラストレーターなどで挿図や集成図などを作成する→可能ならばデジタルデータのまま印刷工程に移動する。

1. 曾利式土器のフィードバック

西関東（神奈川県、東京都）では、加曾利E式土器に占める比率はかなり高い。したがって、土器を考える場合、常に曾利式との対比の元に行われたきた経緯があるため省略する。今回分析する曾利式は加曾利EⅢ式に伴う遺構から検出されるものを主とするが、一部微妙な部分もあり加曾利EⅡ式後半をも含むかもしれない。

北関東や東関東では、従来あまり分析対象とはならなかったものと思う。これらの曾利系列はほとんどが単一機種でシンプルなものである。これに伴う加曾利EⅢ式の構成はどのようなものか。また、その終末はどの段階かが重要になる。

東北地方南部でもわずかに認められる。深鉢と浅鉢である。浅鉢は山形県に多くあり特異な存在である。これは、多分日本海経由大木式拡散のフィードバックと考えられる。これらの、曾利系列に伴う大木式はいかなるものか

北関東や東関東の状況と東北部の状況は従来の考えを裏付けるものか、はたまた再考せざる状況を含んでいるのか分析していく。

1-1. 埼玉県の状況

山間部では、曾利式土器圏と隣接する。群馬県、長野県千曲川流域などとともに共通の土器構成を持っている。同一文化圏と言い直すことが出来る。まずは、基準となる古井戸・将監塚遺跡から見ていこう。

膨大な資料の中から将監塚遺跡の4住居跡をセレクトした。J13号住居跡には連弧文系列の深鉢を含んでいるほかキャリパー形の深鉢に地文沈線文が配されるものを含む。曾利系列の影響が強く吉井城山系を含まない。J93号住居跡もほぼ同様であるが、隆起帯で区画された大木9式系の深鉢を伴う。J49号住居跡とJ50号住居跡は、キャリパー深鉢はすべて加曾利E式系列で吉井城山系を含む。J50号住居跡は連弧文系を含んでいる。これらの段階は加曾利EⅢ式であろう。

以上の状況を踏まえて埼玉県内の状況を確認する。羽沢遺跡2地点32号住居跡は、破片であるが連弧文が多く加曾利EⅡ式段階かもしれない。行司免遺跡279号住居跡を除く当該遺跡の78号・248号・255号住居跡なども古いような気もしないでもないが、キャリパー形深鉢の曾利系を見ると加曾利EⅢ式段階であろう。

さいたま市B37号遺跡6号住居跡と宿東5号住居跡、西ノ原遺跡6号住居跡で大木式系が伴っている。B37号遺跡6号住居跡は隆起帯による胴部渦圈文系で関東地方の胴部渦圈文系の古い部

曾利系列

 北遺跡 44 号住居跡	
 台耕地遺跡 54 号住居跡	
 姥原遺跡 3 号住居跡	
 久保遺跡 1 号住居跡	
 羽沢遺跡 2 地点 1 号住居跡	
 羽沢遺跡 2 地点 32 号住居跡	
 羽沢遺跡 2 地点 60 号住居跡	
 台耕地遺跡 37 号住居跡	
 八番耕地遺跡 18 号住居跡	
 栗谷ツ遺跡 12 地点 20 号住居跡	

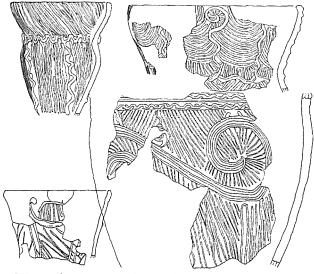
第2図 埼玉県の場合 (1)

曾利系列

栗谷遺跡 12 地点 21 号住居跡



栗谷遺跡 12 地点 31 号住居跡



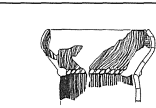
霞川遺跡 2 号住居跡



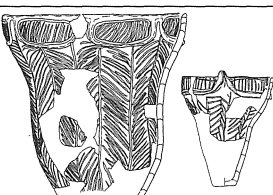
行司免遺跡 61 号住居跡



行司免遺跡 63 号住居跡



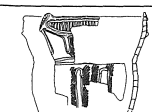
行司免遺跡 78 号住居跡



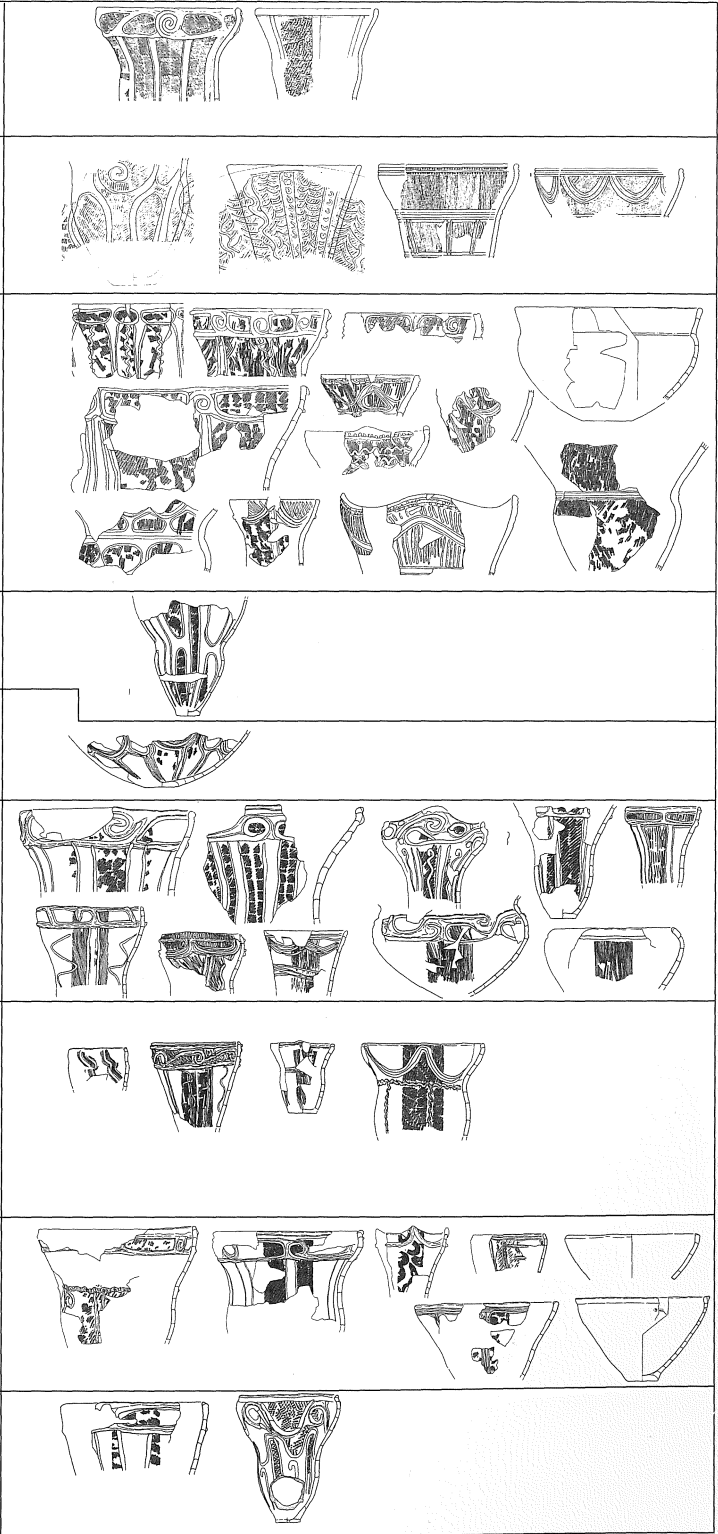
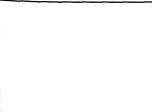
行司免遺跡 248 号住居跡



行司免遺跡 255 号住居跡



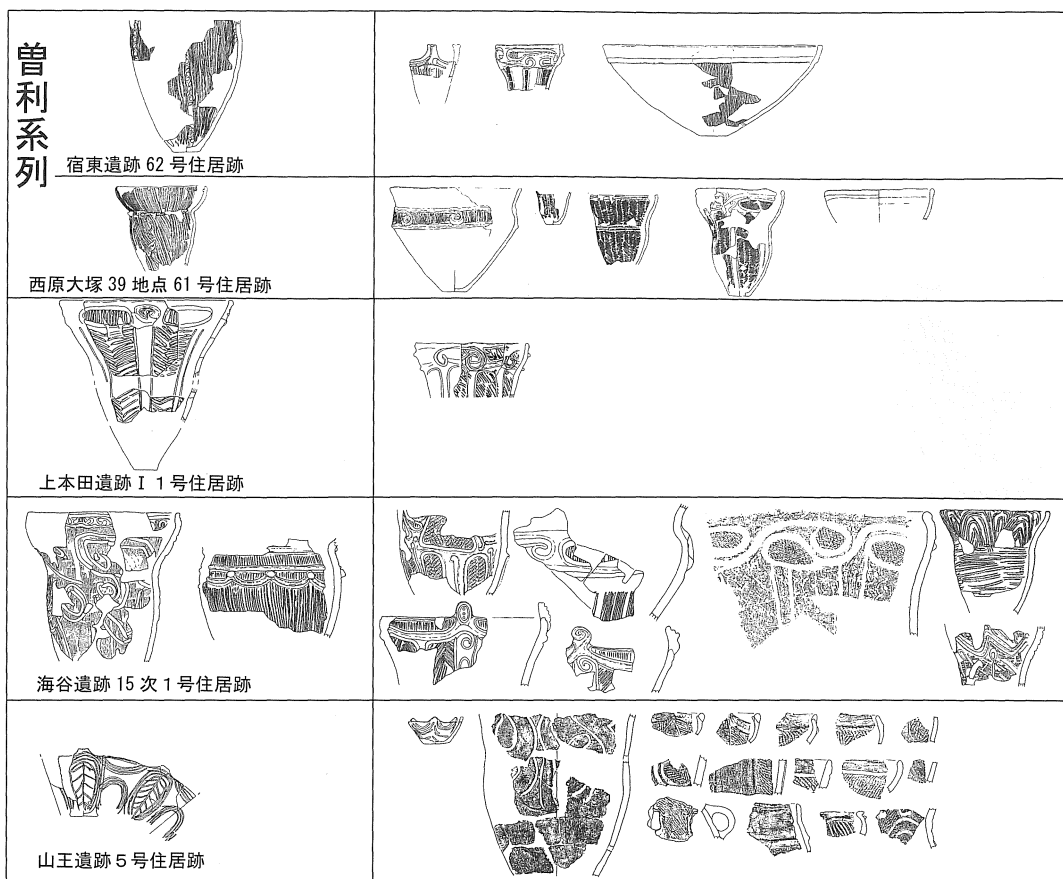
行司免遺跡 279 号住居跡



第3図 埼玉県の状況 (2)

<p>曾利系列</p>  <p>椿山遺跡7号住居跡</p>	
 <p>神明東遺跡2号住居跡</p>	
 <p>沢口遺跡6号住居跡</p>	
 <p>さいたま市B37号遺跡6号住居跡</p>	
 <p>西ノ原遺跡99号住居跡</p>	
 <p>西ノ原遺跡6号住居跡</p>	
 <p>水窪遺跡2次2号住居跡</p>	
 <p>八ヶ上遺跡12地点14号住居跡</p>	
 <p>宿東遺跡5号住居跡</p>	

第4図 埼玉県の状況 (3)



第5図 埼玉県の場合 (4)

分に相当する。宿東遺跡5号住居跡・西ノ原遺跡6号住居跡は口縁部が存在する渦圈文系の土器で胴部文様上半部に縦「S」字状などの特徴的な文様がつく。後述するように、屋代遺跡などを經由する大木式であろう。

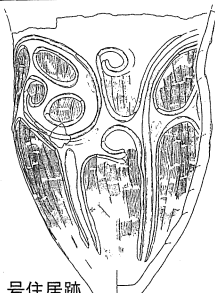



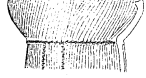




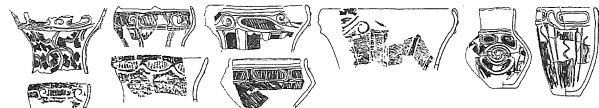
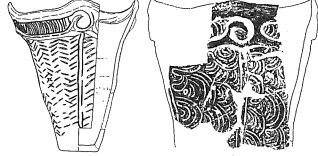
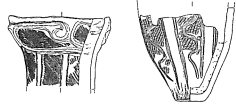



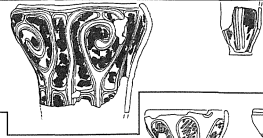




明らかに新しいと思われるものは、西ノ原遺跡99号住居跡と山王遺跡5号住居跡である。西ノ原例は、非常に細密になった地文沈線を持つ曾利系の土器で栃木県槻沢遺跡4.5号住居跡と共通する。共伴する蛇行沈線文がある不可思議な深鉢は、長野県下で生成されたものであろうか。山王遺跡5号住居跡例は楕円区画の中に葉脈状の沈線文を充填するもので、加曾利EⅣ式以降の所産であろう。

以上、埼玉県下の曾利系土器を含む加曾利EⅢ式遺構資料は、わずかな例外を除きナローバンドの中におさまってしまう。「J」字文風の深鉢や胴部渦圈文の新しい部分へはまったく継承されない。見事なほどである。また、伴出する大木9式系も合理的なものである。

2-2. 群馬県下の状況

埼玉県の状況と比較して、曾利系の出土する遺構が思ったほど見つからなかった。勿論筆者が集めたデータはわずかであって今後更なる増強の必要はあるものの、長野県下などの状況を換算

曾利系列

 <p>横川大林遺跡 1号住居跡</p>	
 <p>清里・長久保遺跡 13区4号住居跡</p>	
 <p>荒砥前原遺跡 B1号住居跡</p>	
 <p>上野国分寺・尼寺中間遺跡B区 156号土</p>	
 <p>大平台 A17号住居跡</p>	
 <p>仁田・暮井遺跡 2号住居跡</p>	
 <p>田條仲原遺跡 1号竪穴</p>	
 <p>北宿・観音山遺跡 E-8号住居跡</p>	
 <p>北宿・観音山遺跡 D-5号住居跡</p>	
 <p>倉谷戸遺跡 J2号住居跡</p>	

第6図 群馬県の状況 (1)



第7図 群馬県の状況（2）

して考えると納得できることなのだろう。大木9式系や変容した大木系がその分多くなっているということである。この大木系については後述する。

横川大林遺跡1号住居跡は、大木式の影響を受け変容した曾利系土器である。胴部文様上半部の処理に垣間見られる。キャリパー形深鉢胴部文様楕円文などにも同様の手法が取り入れられる。

北宿・観音山遺跡D-5号住居跡には連弧文系が出土している。とても珍しい。楕円区画文系と伴出である。同E-8号住居跡では、胴部渦圈文系土器が出土している。これも多少の変容が認められる。

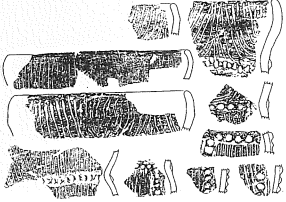












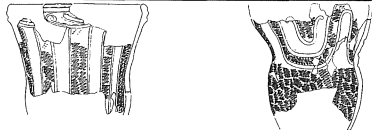






倉谷戸遺跡J2号、下鎌田遺跡75号・154号住居跡などは出土した土器の固体も多く長野県を含めた共通の土器文化圏の様相をよく物語っている。154号住居跡の浅鉢上半部には縦「S」字状の文様が配され、ここにもまた日本海回りの大木9式系の影響が認められる。

新しいと思われる住居跡は1軒である。三原田遺跡6-26号住居跡。曾利系土器は例にもれず、非常に細密な葉脈状文を持っている。この住居跡だけ微隆起線による磨り消し状文を縦に配する深鉢を持っている。これは、加曾利EⅣ式に通じるものである。

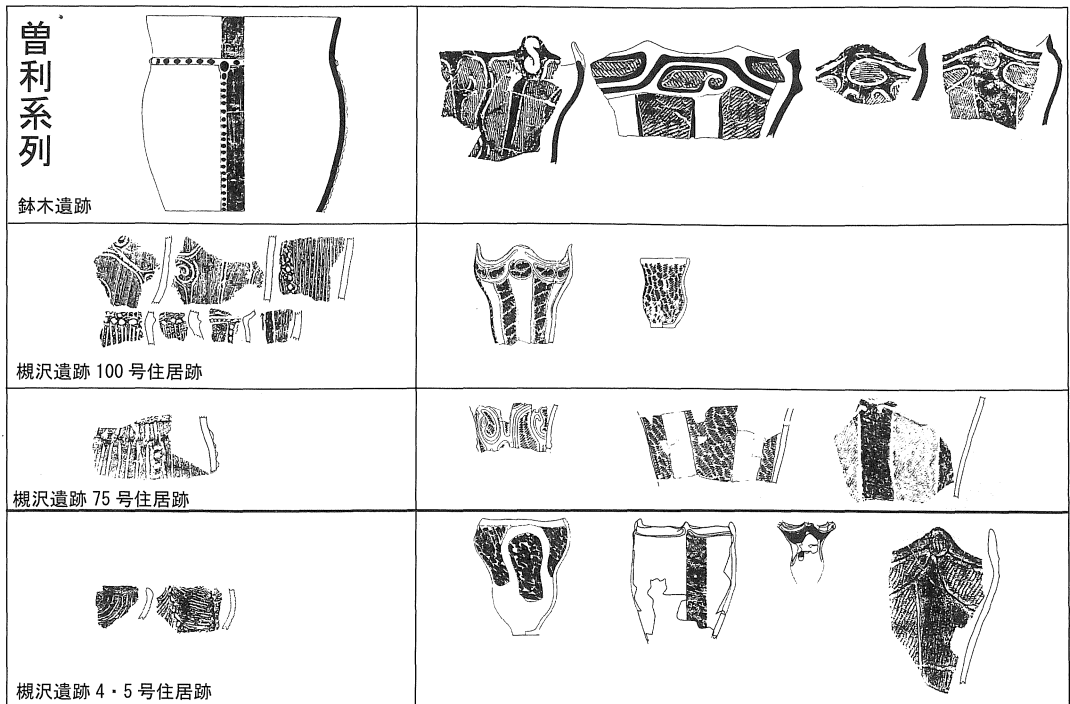
群馬県下の状況も総じて甘味などところがない。ほとんどが加曾利EⅢ式土器で終了している。

2-3. 栃木県の状況

曾利系の土器は一種類の土器である。連弧文系と大木式系との共伴がある。槻沢遺跡がほとんどを占める。大木式は中通地方を經由した福島県側のものか。本論文の趣旨から重複として報告

<p>曾利系列</p>  <p>槻沢遺跡 67号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 87号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 74号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 64AB号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 59AB号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 12号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 42号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 2号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 8号住居跡</p>	
 <p>槻沢遺跡 156AB号住居跡</p>	

第8図 栃木県の状況 (1)



第9図 栃木県の状況（2）


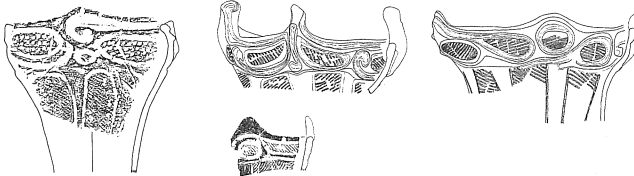

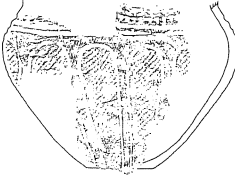




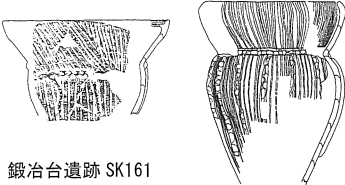


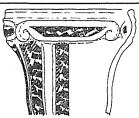
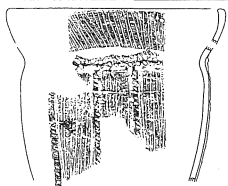

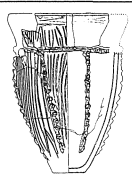
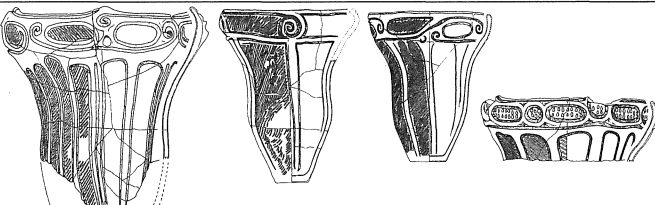
されている住居跡も一括として捉えた。

槻沢遺跡67号住居跡では連弧文系が出土する。胴部下半が磨り消し懸垂文でかなり変容している。87号住居跡では大波頂口縁の深鉢がある。これは、茨城県君ヶ台1号遺構例に共通する。74号住居跡もほぼ同じ時期で加曾利EⅢ式である。

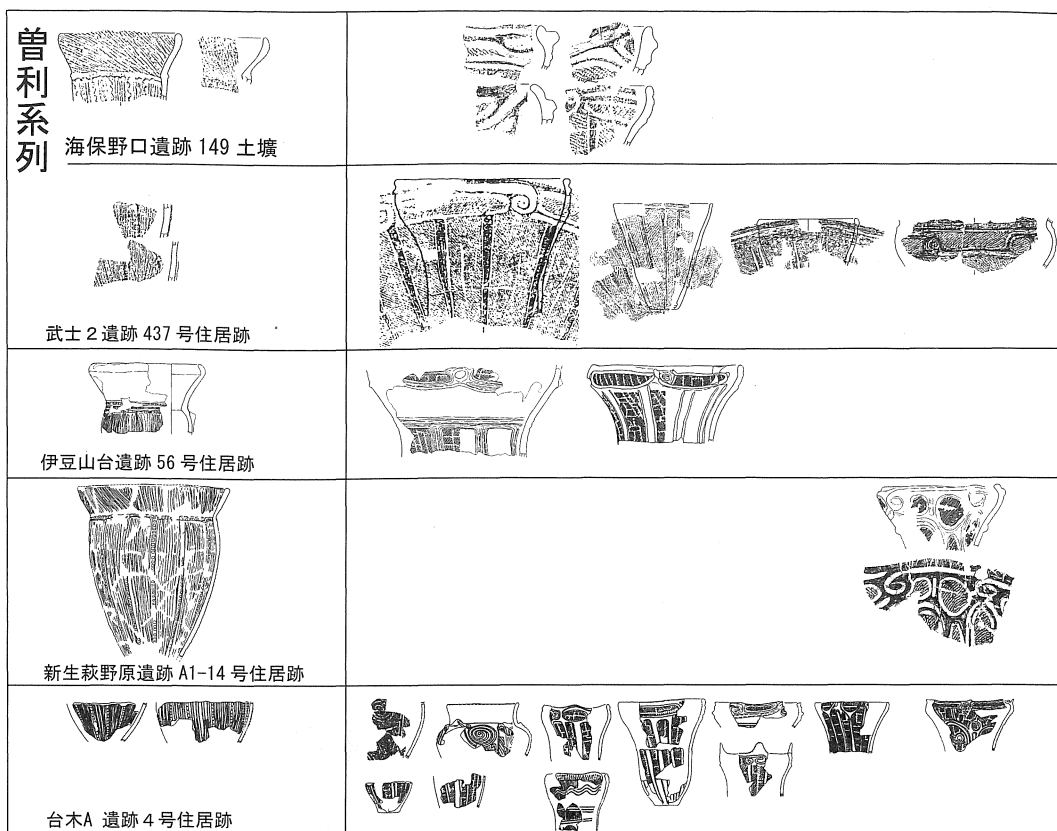
鉢木遺跡は遺構一括ではないが、状況をよく現している。小さな波頂部下に縦「S」字状の文様が入る深鉢は、大木式のモチーフを取り入れながらかなり崩れている。他に加曾利E系の深鉢があるが、胴部の磨り消し懸垂文の幅が非常に広い。これらの判断はむずかしい。

大木式は、槻沢遺跡12号住居跡、2号住居跡、42号住居跡で伴出する。2号住居跡の楕円区画文の土器は判断が難しいが、12号、42号住居跡の大木式は、これまで見てきた大木9式とは一線を画すものである。12号住居跡例は、「C」字状文で多分上限開放・下限開放形であろう。42号住居跡例は、横に長く伸びる磨り消し「S」字状文で下限が縄文で閉鎖される。大木10式に近いものである。

槻沢遺跡8号住居跡、156AB号住居跡では、独特の土器が出土する。胴部下半が楕円懸垂文で空間部を「Y」字形に開けて「の」字状文を入れる。この土器もいままでのものとはおそらく一段階新しいものであろう。尚、156AB号住居跡の曾利系土器は、文様構造は曾利系であるが地文が縄文に変容している。

<p>曾利系列</p>  <p>君ヶ台遺跡1号遺構</p>	
 <p>赤松遺跡 SK158</p>	
 <p>南三島遺跡 3-4区7号住居跡</p>	
 <p>宮平遺跡6号住居跡</p>	
 <p>鍛冶台遺跡 SK161</p>	
 <p>鍛冶台遺跡 SB75</p>	
 <p>前田村遺跡 G・H・I区 378号住居跡</p>	
 <p>坪井上遺跡</p>	

第10図 茨城県の状態



第11図 千葉県の場合 (1)

明らかに新しい段階のものは、槻沢遺跡 4・5号住居跡である。前記したが非常に細密な地文沈線文もつ曾利系の土器である。これに、加曾利 E IV 式、胴部の磨り消し懸垂文の幅がかなり開いたキャリパー形の深鉢が伴出する。

栃木県下では、伴出する大木式に新旧がありそうである。また、加曾利 E III 式より当たらし段階が少しまとまっている。

2-4. 茨城県の状況

検索出来たデータが少なかったが、おしなべて、ネイティブな加曾利 E III 式が伴出する。この時期より新しいものは見当たらない。









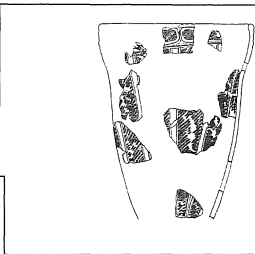













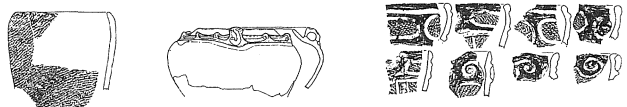


君ヶ台遺跡 1号遺構は、状況の良い資料である。4単位波状口縁深鉢があり、胴部文様の上端は楕円化している。三島遺跡 3-4区 7号住居跡では、連弧文系が出土している。宮平遺跡 6号住居跡の土器も連弧文系の変容したものか。

坪井上遺跡は、遺構出土ではないが、曾利系土器と加曾利 E III 式土器深鉢の関係をよく表している。

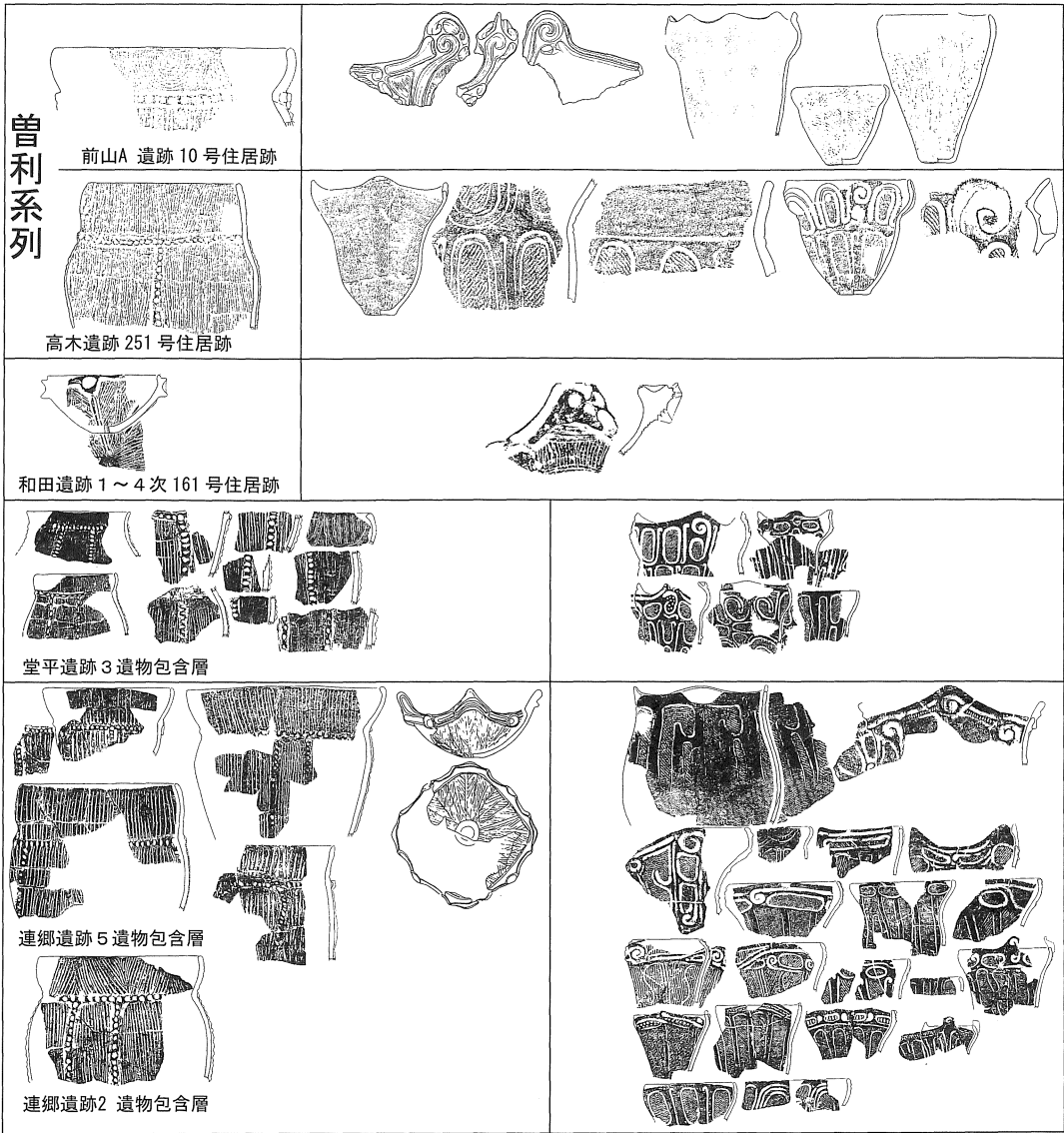
2-5. 千葉県の状況

千葉県下の状況は、茨城県と同様に非常にネイティブな加曾利 E III 式土器が伴出して終了する。

曾利系列

 草刈遺跡 177D 号住居跡	
 草刈遺跡 178B 号住居跡	
 草刈遺跡 209F 号住居跡	
 草刈遺跡 206 号住居跡	 
 墨木戸遺跡9 号住居跡	
 墨木戸遺跡 42 号住居跡	
 台木A 遺跡7 号住居跡	
 台木A 遺跡 50 号住居跡	
 台木A 遺跡 15 号住居跡	
 根木内遺跡 1 号住居跡	
 根木内遺跡 14 号住居跡	
 根木内遺跡 60a 号土壙	

第12図 千葉県の場合 (2)

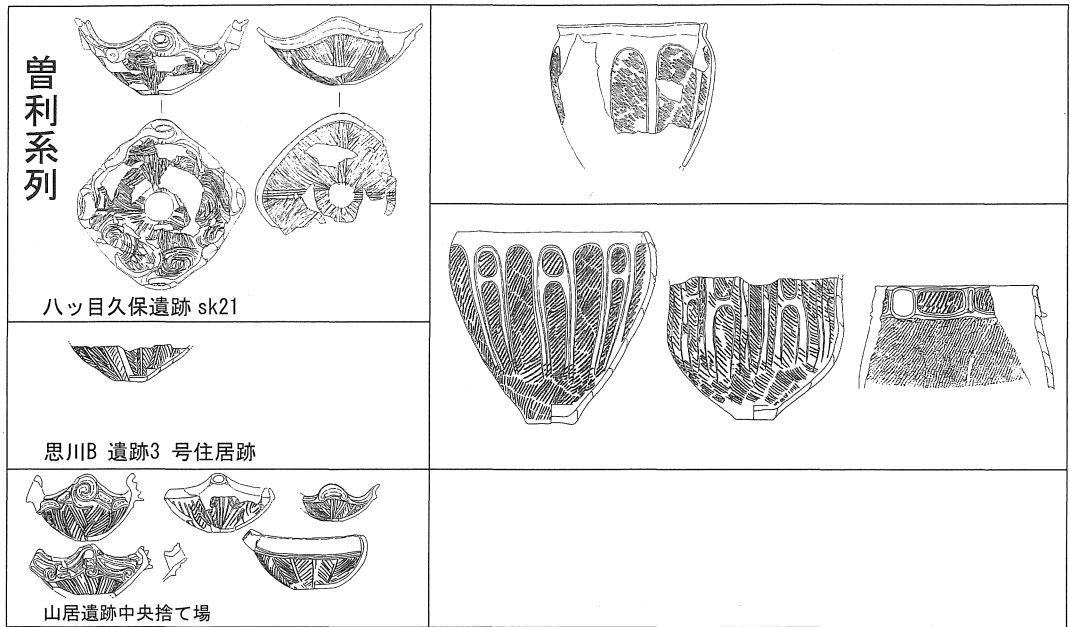


第13図 福島県の状況

加曾利E II式段階なのかもしれないと思う資料も多いが掲載してある。この時期より新らし時期のものは見当たらない。加曾利E III式かどうか考え込むような胴部渦圈文系の土器（千葉県下には大量に存在する）などは、見事に曾利系土器には伴出しない。今後さらにデータを増強して検討していくが、胴部渦圈文系の土器は大部分が、今回分析した加曾利E III式期以降と言い直すことが出来るかもしれない。

伊豆山台遺跡56住居跡号は、頸部に無文帯、隆帯による胴部懸垂文があるキャリパー形土器が伴出している。これは、混入か。

草刈遺跡177D号、178B号、209F号、206号住居跡は、若干古いような気がしないでもない



第14図 山形県の状況

が加曾利EⅢ段階とした。本論は、下限を気にしたものとなっているためである。台木A遺跡7号、50号、15号なども同様に古そうであるが、一部明らかに加曾利EⅢ式の口縁部文様を持つ深鉢が出土している。

根木内遺跡1号住居跡では、連弧文系が多く出土している。前記と同様加曾利EⅡ式段階なのかもしれないが、右側の深鉢口縁部は、加曾利EⅢ式のものである。根木内遺跡60a号土壇は楕円区画文が見られる。

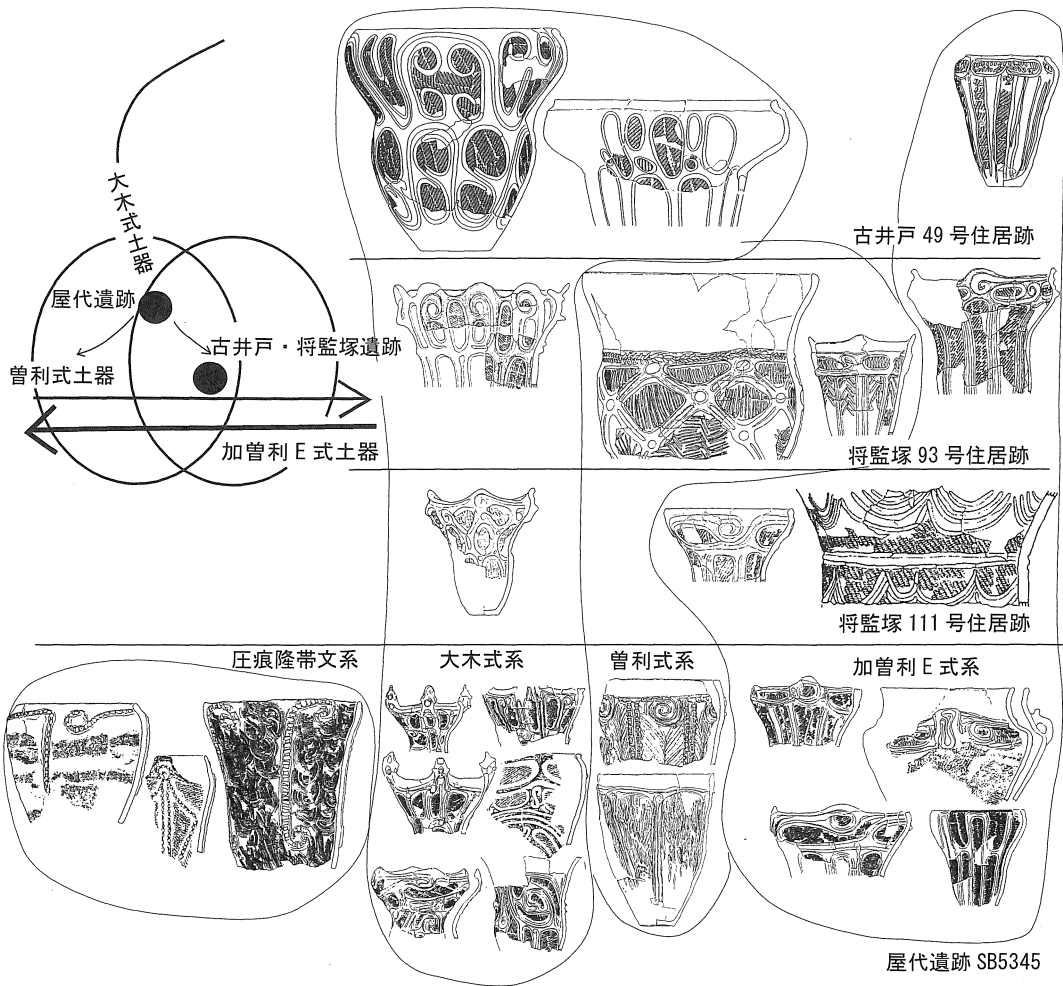
新生萩野原遺跡A1-14号住居跡と台木A遺跡4号住居跡から大木9式土器が出土している。新生萩野原例は、隆帯による楕円文や渦文、楕円文との間を棒状の文様で区切る特徴的な手法が見られる。台木A遺跡例は、口縁部を持つ渦圏文系の土器である。埼玉県宿東遺跡5号住居跡例などと共通する。

2-6. 福島県の状況

遺構からの出土は少ない。従って、遺物包含層を加えた。上半部でいったん括れる深鉢は、ずっと見てきたように太平洋側から入る。2例見られる特異な浅鉢は、多分日本海側から入るものと思われる。

前山A遺跡10号住居跡は、隆起帯による渦圏を中心とした文様が配された深鉢で大木9式。高木遺跡251号住居跡は、隆帯による渦圏文と楕円文、および沈線文による楕円文が描かれる同ネイティブな大木9式土器である。和田遺跡1~4次161号住居跡は、浅鉢が2点。隆起帯による狭小な口縁部文様を持ち、葉脈状沈線文の地文を持つ。

堂平遺跡3包含層、連郷遺跡2遺物包含層を参考として掲載した。たぶん、このような大木9




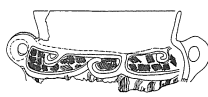

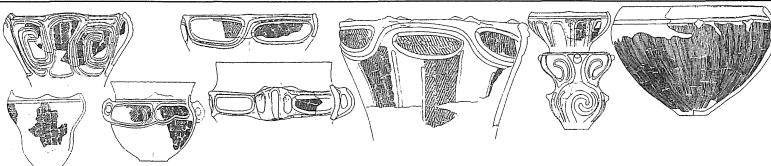


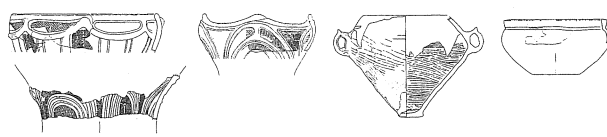
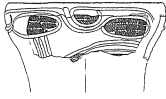

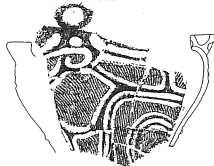

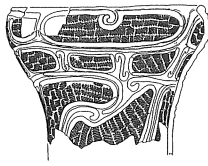

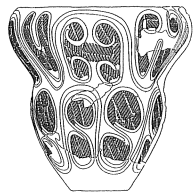
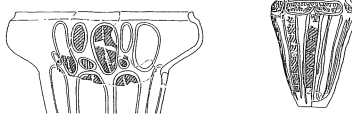
第15図 屋代遺跡と古井戸・将監塚遺跡（大木系、加曾利E系、曾利系の関係）

式土器が伴うであろうという意味である。連郷遺跡の浅鉢は非常に緻密な葉脈状文である。また、「C」字状の文様を持つ土器も抽出しておいた。概して、隆起帯による大木9式と沈線文などで描かれた流麗な磨り消し縄文を持つ加曾利EⅢ式土器交雑の時期である。

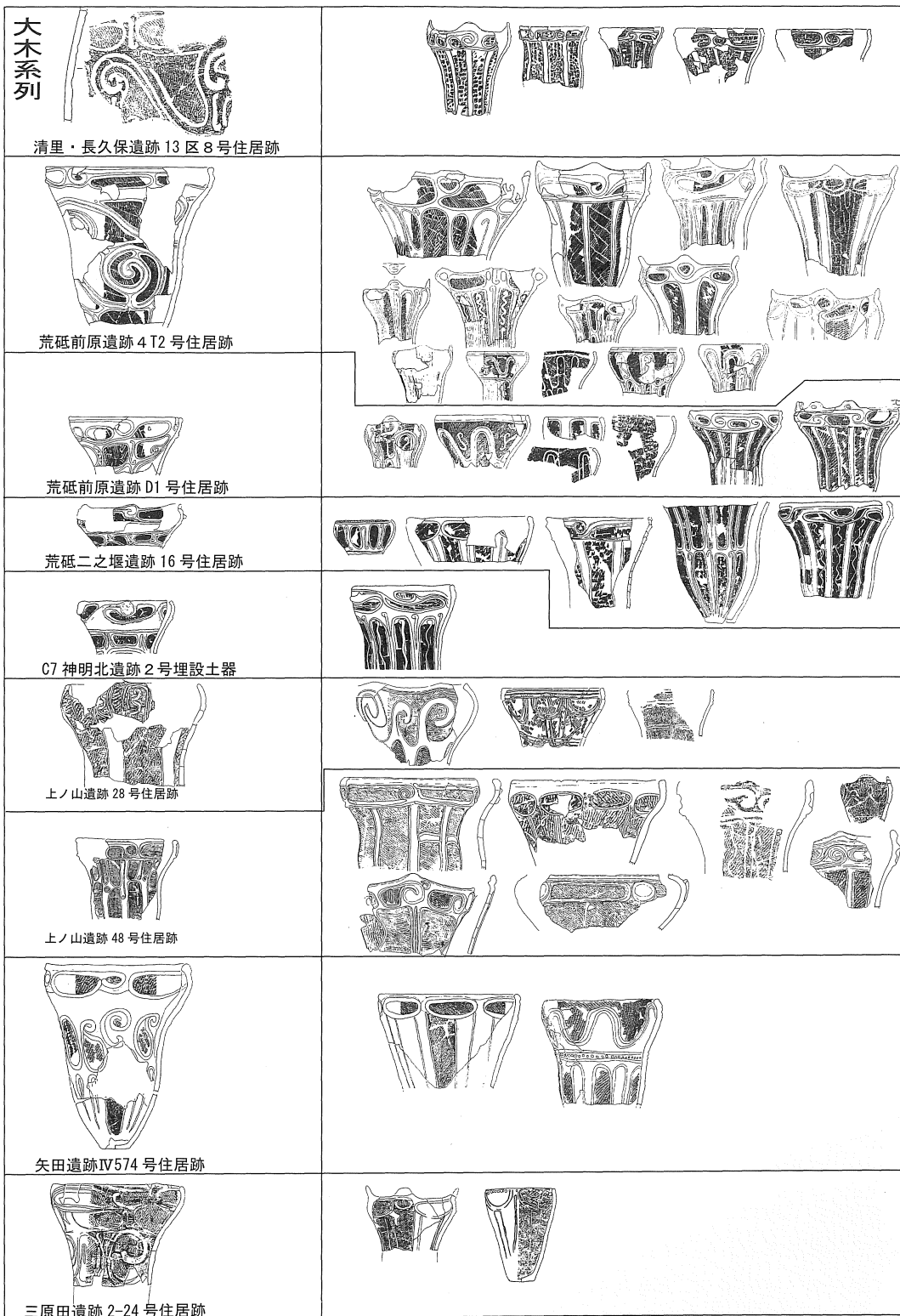
2-7. 山形県の状況

福島県側と異なり、浅鉢だけの出土である。遺構は2件探索できた。少ないがいずれも大木9式が伴出している。八ッ目久保遺跡SK21からは、非常に細密な葉脈状文を地文に持つ浅鉢が2点出土している。伴出する大木式は、沈線文による楕円区画文を持つ。思川B遺跡3号住居跡からは、わずかに浅鉢底部付近が出土している。細密な葉脈状文である。伴出する大木式土器は、特徴的な沈線文による流麗な楕円区画文である。さらに、口縁部に隆帯による楕円区画文があり、以下を縄文とする土器も出土している。

山居遺跡中央捨て場からも多くの浅鉢が出土している。注目される。浅鉢だけが出土するとい

<p>大木系列</p>  <p>久保遺跡 11号住居跡</p>	
 <p>宿東遺跡 16号住居跡</p>	
  <p>宿東遺跡 56号住居跡</p>	
 <p>宿東遺跡 61号住居跡</p>	
 <p>氷川前遺跡 18次・22次～26次 26号住居跡</p>	
 <p>古井戸遺跡 J45号住居跡</p>	
 <p>古井戸遺跡 J49号住居跡</p>	

第16図 埼玉県の大木系土器



第17図 群馬県の大木系土器

う特異現象は多分、三十稲場式の浅鉢が東北地方一円に広がる事象に先行するものと思われる。

小結

遺構資料を中心に曾利系土器にどのような在地の加曾利E式土器や大木式土器が伴出するのか見てきた。地域は、北関東・東関東・東北南部に及んだ。これは、従来からの加曾利E式土器の分析では主ではなく、ましてや曾利系土器の分析はあまり行われなかった。

データはこんなものではないはずで、多くの見逃した資料があると思われるが、ある程度の傾向は出たような気がする。以下箇条書きでまとめる。

1. 北関東・東関東の加曾利EⅢ式に伴出する曾利系土器は、栃木県の一部を除きネイティブな加曾利EⅢ式で終了する。千葉県の間部渦圈文の多くや従来加曾利EⅢ式の範疇とされた胴部に括れる器形を持ち、2a文様帯に磨り消し「J」字状文や渦圈文を持つものなどは伴出関係に含まれない。

2. これら加曾利EⅢ式土器は、どちらかというに加曾利EⅡ式後半との結びつきが強い。従って、ここで分析した曾利系を伴出する加曾利EⅢ式とそれ以降とで分断線を引けばきわめておさまりはいい。

3. 埼玉県や群馬県では曾利系土器とともに変容した大木9式系が出土する。これは、長野県屋代遺跡などを介在として、加曾利E式と混ざっていく過程のものであろう。今後更なる分析が必要である。

3. 大木9式が日本海回りで南下するフィードバックとして、山形県や福島県では葉脈状文を地文とする特異な浅鉢が出土する。勿論、時期は大木9式である。

4. 古井戸・将監塚遺跡などを除いて、吉井城山系の伴出は極めて少ない。

2 日本海回り大木9式の南下と埼玉県・群馬県の状況

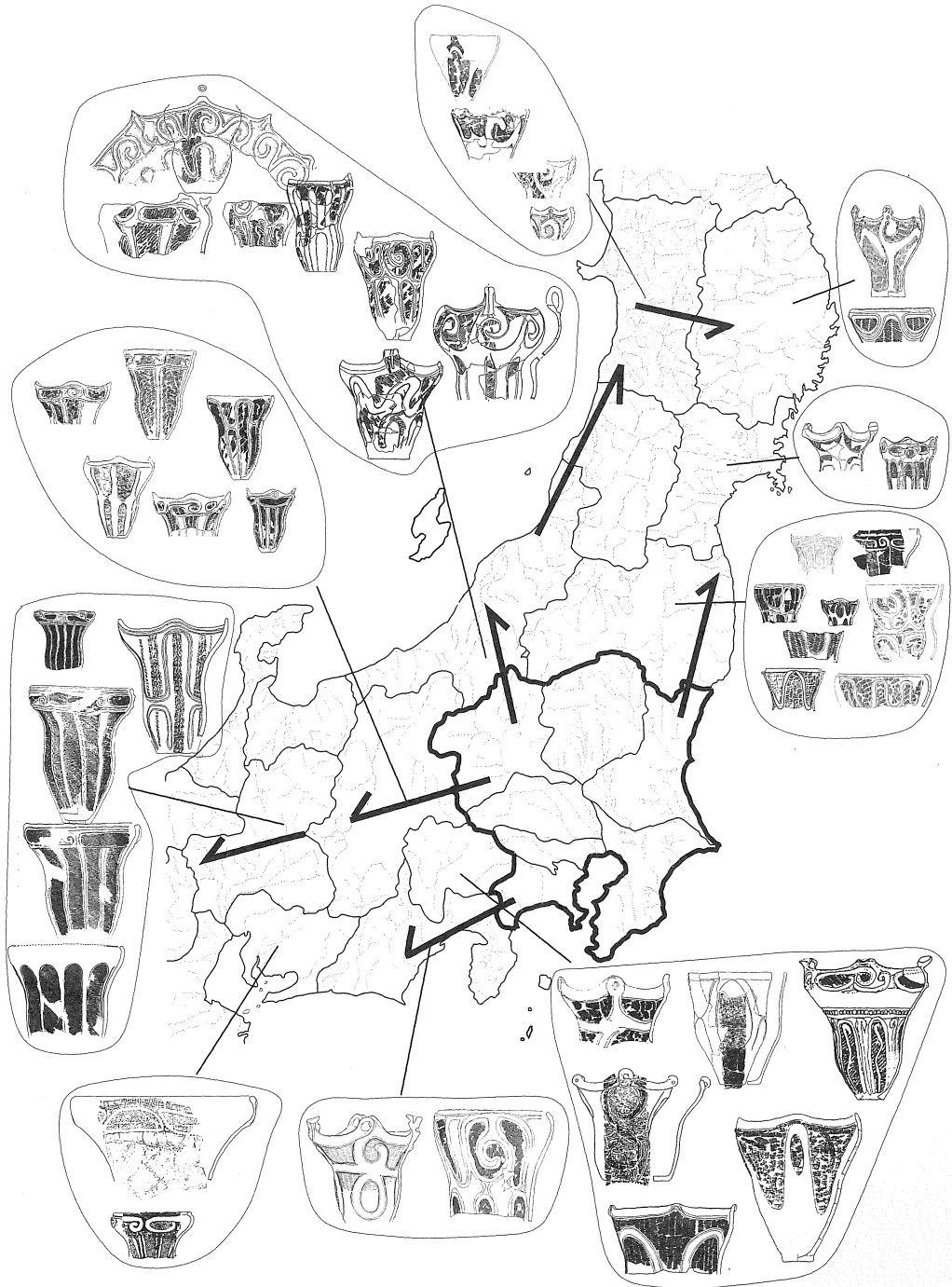
冒頭でも述べたが、資料の増加と研究の進展は、曾利系土器のフィードバックとともに変容した大木9式もを関東地方にフィードバックすると考えざるを得なくなった。(谷井はこれを梶山類とは別種とした)資料を抽出して、今後の分析の端緒としたい。

2-1. 屋代遺跡と古井戸・将監塚遺跡

まず、屋代遺跡SB5345から見ていく。引用した土器のほかに多くの土器がある。加曾利E系、曾利系、大木系、圧痕隆帯文系からなっている。大木9式は大波状口縁と平縁の二種類である。大波状口縁土器は、梶沢遺跡87号住居跡や君ヶ台遺跡1号遺跡例などと共通する。平縁深鉢は、胴部に大柄渦圈文を配するが、特徴は楕円文などの間にある縦「S」字状文や棒状の文様である。概して、隆起帯で描かれるものが多い。

曾利系は、隆帯上の刺突も地文沈線文も非常に細密である。加曾利E式は、キャリパー形の深鉢と吉井城山系である。勿論、これは加曾利EⅢ式である。

これに対する古井戸・将監塚遺跡は、3つの住居跡を抽出した。古井戸49号住居跡、将監塚93号住居跡、将監塚111号住居跡である。将監塚遺跡の2つの住居跡に伴出する加曾利E式は連弧文系や胴部に3本沈線の磨り消し懸垂文など古い要素があるが加曾利EⅢ式の範疇であろう。



第18図 加曾利E系 (E III式以降) 拡散の概念図

基本的に前節で分析した曾利系を伴出する加曾利EⅢ式と同じである。古井戸49号住居跡はモチーフ自体は両端が丸まる「蕨手文」や楕円文であるが、流麗な磨り消し縄文となっている。大木9式が加曾利EⅢ式の要素を取り入れて変容したとも言える。問題は変容のスピードであろう。

2-1 埼玉県の状況

宿東遺跡の評価が中心である。宿東遺跡16号・56号・61号住居跡は、報告書で宿東6期とされた。ひさご形土器が見られるし、両耳壺が入る。吉井城山類はない。柄鏡形住居跡がある。という段階である。同遺跡で曾利系土器が入る宿東5号住居跡とは峻別されるということである。今回の曾利系を伴出する北関東・東関東の加曾利EⅢ式の結果と照合すると、宿東5期と宿東6期の分別は納得の出来るところである。

この変容した大木9式（あるいは古井戸遺跡49号住居跡段階）は、久保遺跡11号住居跡でも見られる。両耳壺が伴う。同様の規範の土器が群馬県上ノ山遺跡28号住居跡にある。この遺構からは、2a文様帯に「J」字文を含む土器を含む。同様に、氷川前遺跡18次・22次～26次-26号住居跡からは、2a文様帯渦圈文の土器が出土する。

2-2 群馬県の状況

矢田遺跡IV574号住居跡は、曾利系が伴出する横川大林1号住居跡の曾利系とよく似た文様構成をとる。空間処理の仕方は、埼玉県宿東遺跡と似ているような気もするのだが。荒砥前原遺跡4T112号、D1号住居跡は吉井城山系を含む。概して、埼玉県宿東遺跡から見ると古くなるような感じがしてしまう。さらに、曾利系を含む加曾利EⅢ式わずかに違いが見られるような気がする。これは地域差（要するに、吉井城山系を含むか、そうでないか）なのだろうか。今後、資料を増加して分析したい。

小結

日本海経由で南下する大木9式土器が与えた影響は、今後更なる分析が必要である。加曾利EⅢ式と出会って大木9式は変容するのであるが、1時期のタイムラグはあるのかという疑問は、宿東遺跡を見るとやはりあるといわざるを得ない。宿東遺跡5類と6類の分割、谷井の梶山類の2分割、今回の曾利系を含む北関東・東関東の加曾利EⅢ式と合わせて考え、変容する大木9式を理解したい。

筆者の仮説で言えば、拡散する加曾利EⅢ式と変容する大木9式。それに曾利系を加えた三者がフォサマグマを越え西日本に広がる。さまざまな在地土器を生成するのであるが、そのフィードバック（たとえば、中津式）がタイムラグをもっているのか、いないのかに尽きる。

ネイティブな加曾利EⅢ式段階以降（宿東6類以降と言い換えてもいい）のどの段階に中津式が入るのかと言い換えてもいい。

元来、関東地方の胴部渦圈文系や2a文様帯が「J」字文になる土器などが関東地方本来の変転をとげて、称名寺式を形成すると筆者は考えている。

3. 加曾利EⅢ式の拡散

（以下、次回につづく）

研究紀要 第19号

2004

平成16年7月26日 印刷

平成16年7月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社